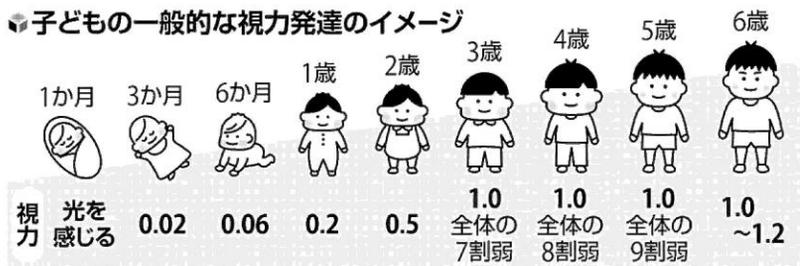


# #子育て処方せん

## 子どもの一般的な視力発達のイメージ



(後藤医師への取材を基に作成)

# 「弱視」兆候見逃さないで

子どもを取り巻く様々な病気の疑問に福岡市立こども病院の医師が答える「#子育て処方せん」。今回は、眼科長の後藤美和子医師に、斜視や視力の異常に関する検査や治療法について聞いた。

## 目の病気

当院の眼科に来院する新患の3割強が斜視、2割が近視、遠視、乱視などの屈折異常で、二つ合わせて全体の半数を占める。そのほか、涙を鼻に排出する管の通りが悪くなる鼻涙管閉塞や、まつ毛が内側に生えて眼球に当たるとする内反症も見られる。

斜視は、まっすぐ前を見ていても片方の目が上下や左右にずれてしまうものだ。症状や程度は個人差が大きい。屈折異常は目に入った光が網膜上で像を結ばなくなることで起こる。

いずれも視力の発達が途中で止まる「弱視」につながる恐れがある。斜視に伴う片方の目の弱視は、軽症であれば、正常な目を隠して斜視の目だけで見るとレ



後藤美和子 医師

ニンクで回復することが多い。症状によって、専用の眼鏡で矯正したり、手術で目の向きを調整したりする。屈折異常に伴う弱視の大半は、治療用の眼鏡でピントを合わせることで視力の発達が再開する。

子どもの視力は生後6か月で0.06、1歳で0.2、2歳で0.5、3歳で1.0と急速に発達する。元々見えていないため、発達に異常があっても、本人が見

## 屈折検査機器導入進む

3歳児健診での視覚検査で、屈折異常などを見つけて専用機器を導入する自治体が増えている。精密検査が必要なケースの見逃しを防ぎ、有効な治療につなげることが期待される。

が、3歳児は言葉で表現するのが難しいといった課題があり、2023年秋から機器での検査を追加した。機器は遠赤外線を利用し、屈折異常のほか、斜視の有無も判定できる。同市では導入前の4年間で精密

「おめめの写真を撮るよ」福岡市の健診会場で11月、看護師が呼びかけると、女兒が機器を見つめた。異常なしとの結果が示され、数秒で終了。母親(38)は「早いうちに異常を発見できるのなら安心」と語った。同市では家庭でチョウなどの絵を見せて名前を答えさせる検査を実施している



専用機器での検査を導入する自治体は増えている(福岡市) 検査が必要と診断されたのは平均3.4%だったが、23年度は6.5%とほぼ倍増した。日本眼科医会の全国調査によると、機器の導入自治体は21年の28%から23年は74%に上昇した。国が22年度に導入経費の補助を始めたことが追い風になっているという。ただ、地域で差があり、23年の調査で佐賀県では全自治体が導入する一方、沖縄県は半分程度にとどまっていた。

同会の近藤永子・常任理事は「どの地域にも弱視の子はおり、誰一人取り残さないことが大事。地域差を解消できるよう取り組んでいきたい」と話す。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください

## 視力発達9歳まで 早期発見 重要

えにくくなった」と訴えることはまれだ。子どもの50人に1人は弱視と言われるが、見逃されているケースも多いとみられる。

公的な健診では3歳児健診で初めて視力検査を行う。ここで見逃すと、小学校入学直前の就学時健診まで発見が遅れることも多い。視力の発達は9歳までには止まってしまったため、できるだけ早く見つけて治療を始める必要がある。

各家庭でも、テレビを近くで見ただる、ものを見るとき目を細める、まばたきが多いといった兆候があれば、弱視の可能性を疑い、健診を待たずに最寄りの眼科を受診してほしい。

(聞き手・大森祐輔)